

# 山古墳群



1974

島根県安来市

## はじめに

宮山古墳群が発見されたのは、昭和48年11月のことである。すなわち、安来開発工業株式会社が安来市立第3中学校に北接する宮山丘陵で住宅団地の造成を計画したことから、安来市教育委員会では島根県埋蔵文化財調査員の内田才氏に分布調査を依頼し、11月28日に現地調査を行い、前方後方墳1基を含む古墳5基を確認した。その後、12月15日島根県教育委員会文化財保護主事近藤正氏により再度分布調査が行われ、古墳以外にも丘陵の平坦部において住居跡あるいは土壙墓などの存在が推定された。



宮山古墳群の位置

1 宮山古墳群 2 仲仙寺古墳群 3 安養寺古墳群

そこで、島根県教育委員会ではこれらの結果をもとに関係各方面と協議を重ね、造成工事に先立つ事前調査を実施することとなった。調査は島根県文化財愛護協会が委託を受け、近藤正文化財保護主事を担当者に昭和49年2月20日から4月26日までの約2ヶ月間を費して行った。なお、その間、安来市教育委員会をはじめ地元各位から多大な援助と協力をいただいた。記して深甚の謝意を表する次第である。



宮山古墳群の遠景

## 位置と環境

この古墳群は安来平野の西部を流れる飯梨川下流域の左岸、標高28mあまりの独立丘陵上にあり、その地籍は安来市西赤江町字宮山 853 の 5 ほかである。このあたりは西の松江・出雲両平野と並ぶ出雲の三大穀倉地帯の一つで、付近には 500m 内外の至近距離で西南に仲仙寺古墳群（四隅突出型方墳 2 基を含む——一部消滅）、北に安養寺古墳群（四隅突出型方墳 2 基—消滅）があり、さらに西南の荒島丘陵には造山古墳群、大成古墳、塩津古墳などといった 4 ~ 5 世紀代の古墳が集中し、山陰地方のなかでは特に古式古墳の密集地帯として注目されているところである。

いま丘陵の上に立つと、遙か東方に大山の秀峰が遠望され、眼下には安来平野の美田地帯、さらに中海をはさんで北方には島根半島の山並みが展開し、眺望まさに絶佳ともいべき位置を占めている。



古墳群から北を望む

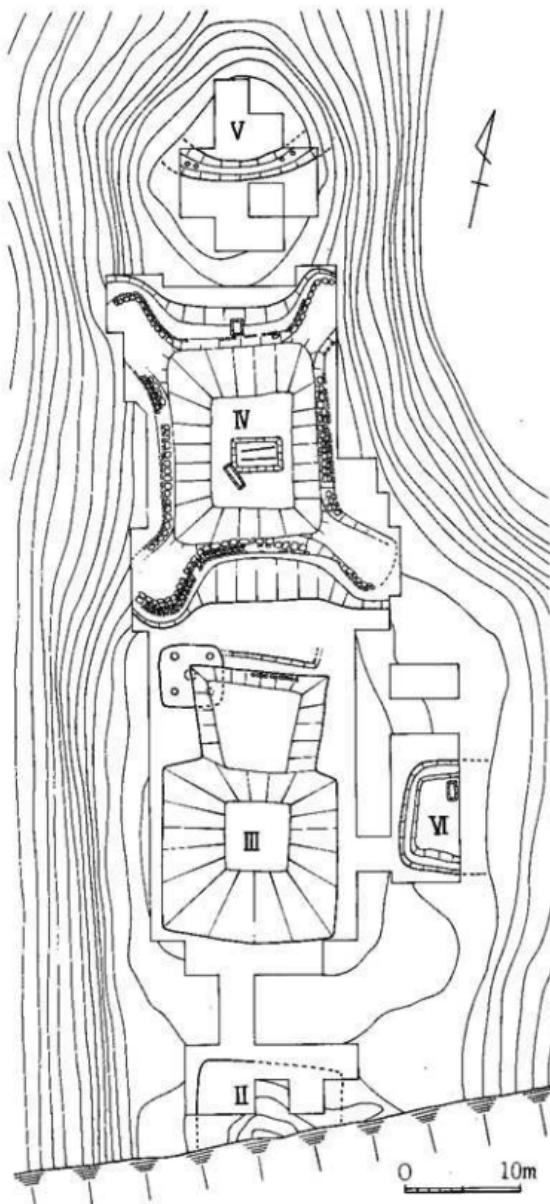


宮山丘陵から大山を望む

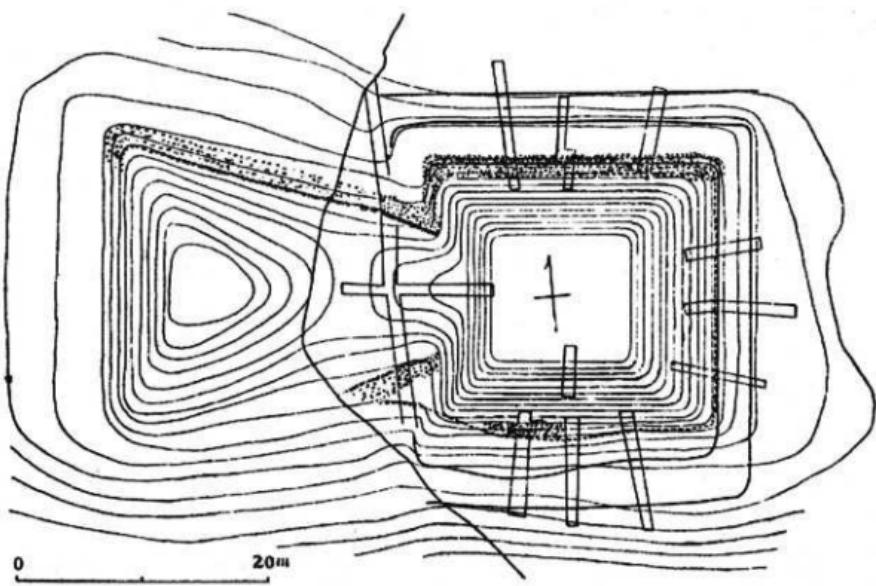
## 遺跡の概要

宮山丘陵はもともと南側に長く伸びていたが、安来市立第3中学校の建設に伴い大半が削平され、それと同時にこの地点にあった宮山古墳も消え去った。この古墳は神塚古墳とも呼ばれ、昭和30年と34年に発掘調査が行われているが、今回の調査ではこれを宮山第I号墳と呼ぶことにした。

現在残されている丘陵は、長さ約100m、幅20~40mで南北に細長く、南端の崖面から北に向って第Ⅱ号墳~第V号墳がほぼ一直線に並び、さらに第Ⅲ号墳の東側平坦部に第Ⅶ号墳、第Ⅲ号墳の前方部西寄りに竪穴式住居跡1棟が営まれている。まさにこの丘陵は有効面積のほぼ全面が遺跡として利用され、しかもそれは第Ⅳ号墳の上表部から宝篋印塔の相輪片が発見されていることから、かなり長期にわたっていたことがうかがえる。



遺構配置図



**第Ⅰ号墳** 昭和30年と34年に行われた発掘調査の結果（駒井和愛・山本清「安来市宮山古墳の発掘」平凡社『山雲・隠岐』昭和38年）によると、この古墳は前方部を西側に向けた全長約60mあまりの前方後方墳で、墳丘の斜面を埴輪円筒と一部形象埴輪で飾り、その周囲に列石をめぐらすものである。墳丘は地山に切削加工を加え、その上に後方部で約6m、前方部で約4mの盛り土を施し、二段に築成されている。全面に孟宗竹がおい繁り、墳丘の上面が損傷していたことなどから、主体部は不明であったが、木棺直葬かあるいは舟形石棺などを内部構造とするものであったとみられる。

時期は墳丘の築成法や封土中に含まれていた土師器の形式などから5世紀前半頃と推定されている。

**第Ⅱ号墳** 丘陵南端の崖面上に位置するもので、南側の大半が失われている。墳麓線の西側と北側に一部方形の肩溝が認められたことから一辺約10m、高さ約0.7m前後の小規模な方墳と推定されるが、内部構造については不明であった。封土中より若干の埴輪円筒片が発見されている。





第Ⅲ号墳 第Ⅱ号墳の北側に営まれた全長24mの前方後方墳である。後方部は一辺約15.5mのはば正方形を呈し、高さは2.3m。前方部は北に向けて設けられており、長さ8.5m、くびれ部幅10m、前端部幅12mと、幅に対して長さが短いのが特徴的である。高さはくびれ部で1.2m、前方部先端で1mを測り、くびれ部からしだいに高まりを減じている。墳丘の築成は大半盛り土によってなされており、前方部には北側に墳域を明確にするための幅1~1.5m、深さ0.5mほどの溝が設けられている。



第Ⅲ号墳 前方部の埴輪円筒列

外部施設としては、墳丘の周囲に埴輪円筒を並べた形跡があるほか、後方部東側斜面には葺石と考えられる石材若干が認められた。ただし、埴輪列は全般的に遺存状態が悪く、わずかに前方部前端で原位置のものがみられ、ここでは30~40cmという密な間隔で樹立されていた。

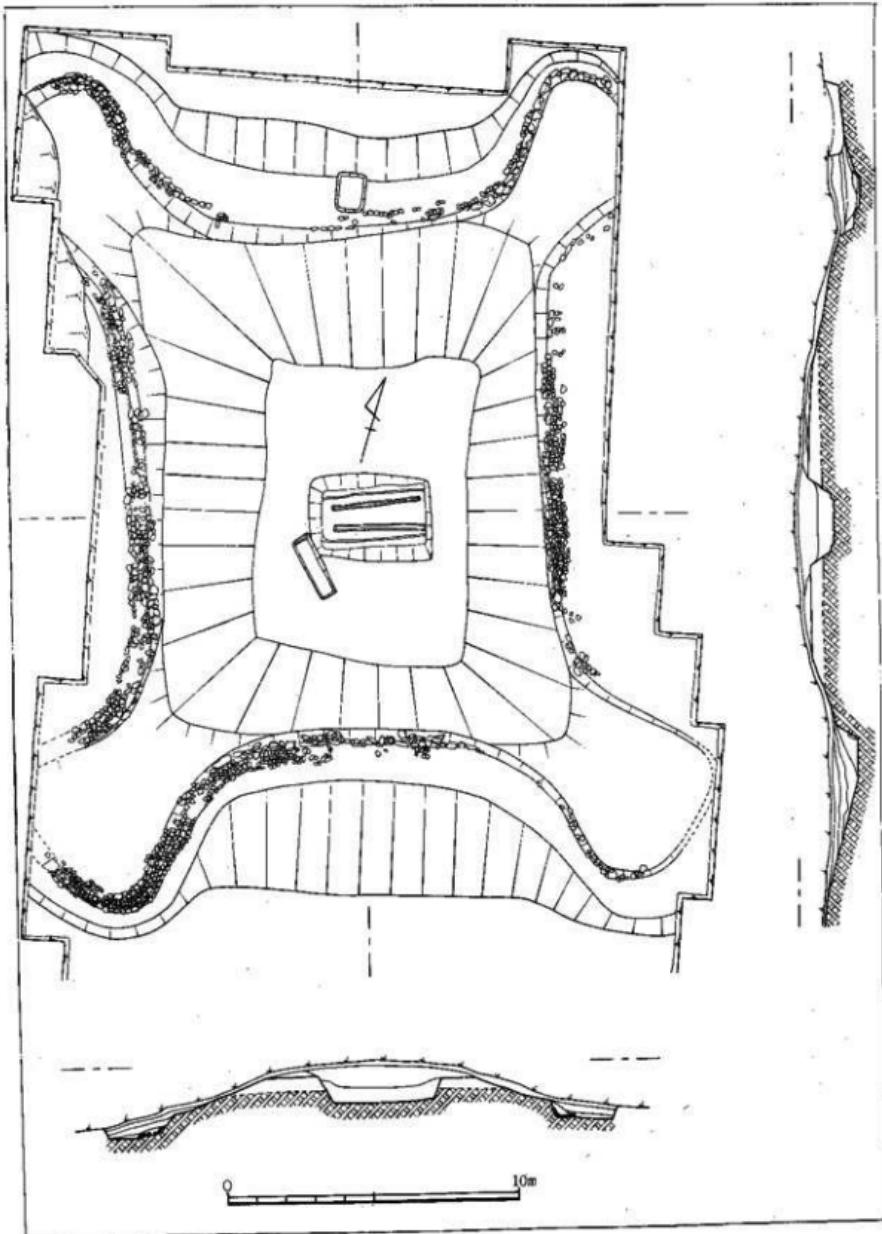
内部構造は不明であったが、墳央部に石材2~3個が認められ、また須恵器片がまとまって発見されたことなどからあるいは木棺直葬様のものではなかったかと思われる。時期判定の資料に乏しいが、この古墳は、須恵器や埴輪円筒の形質および墳形などから6世紀前半頃の築造と考えられる。

第IV号墳 地山をイトマキエイ形に造成したいわゆる四隅突出型の特殊方墳で、四方とも溝によって墳域を画し、墳央部に約1mの盛り土を施している。規模は突出部を含めた場合、南北径30m、東西径24m、突出部を除けば18×15mで、墳頂部には10×7mの平坦面がある。高さは墳頂部で約2m、突出部では0.5m前後である。

突出部を含め墳裾には転石あるいは山石による列石がめぐらされている。しかし、



第IV号墳 西南突出部



第四号墳 墓丘断面図

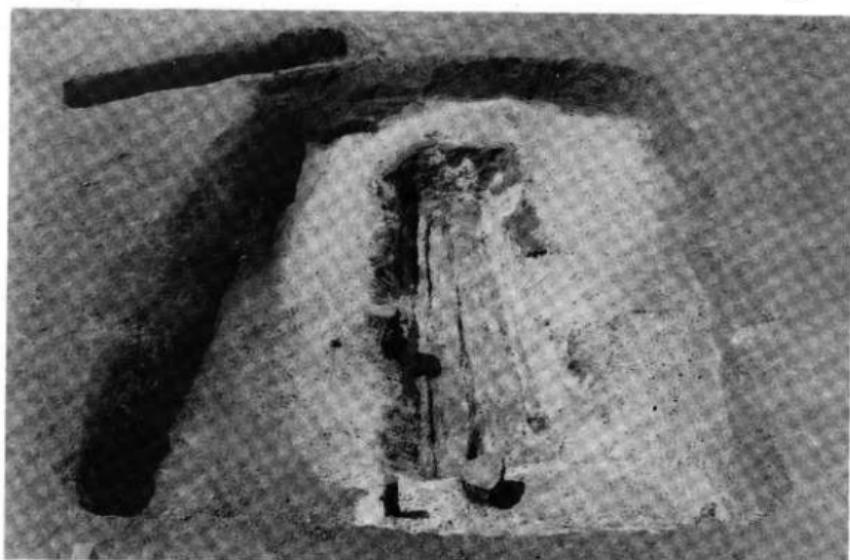


その様相は必ずしも同一ではなく、それぞれに若干の相違がみられる。すなわち、もっとも保存状態の良い南西突出部では墳裾に10~20cmあまりの石を縦横相互に配置し、二重の溝状構造を作ったのち、斜面に扁平な石を貼りつけているのに対して、西辺ではそれが2段の階段状になつており、北西突出部でもこれに似た状態を示していた。また東辺は外側の石を立て並べたのち幅約30cmの間隔を挙大の石で水平にうめ、一旦テラス状の平坦部を形成しながら墳丘斜面の貼石へと接続していた。列石

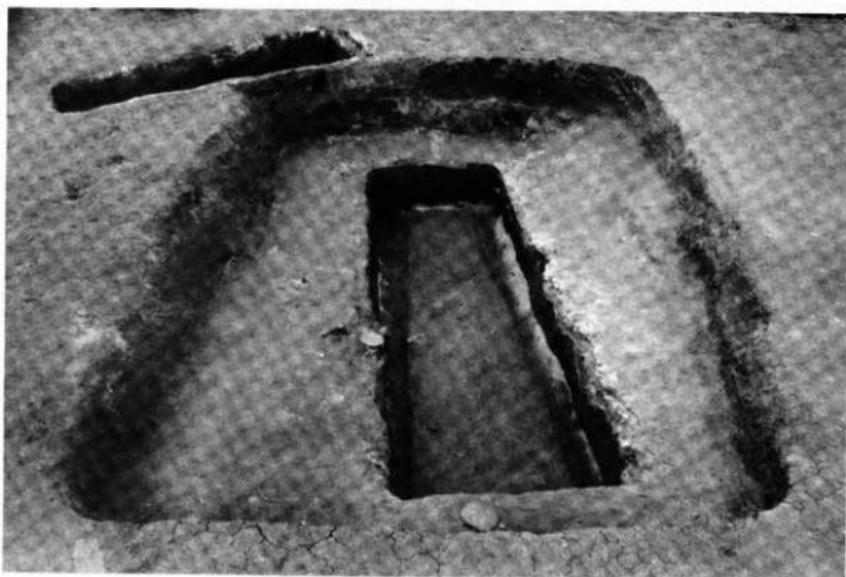
および貼石は一部東辺と北辺で不完全な部分がみられたが、これは付近からあまり石材が発見されなかったことからすれば、本来この二辺には充分に石材を用いなかつとも考えられる。



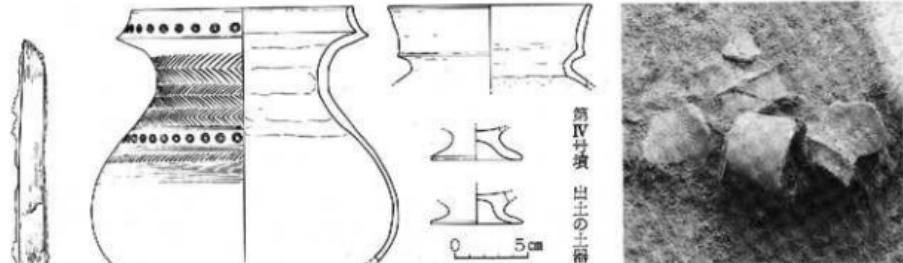
埋葬施設としては墳頂部平坦面のほぼ中央に主軸を東西方向におく長方形の墓壙が掘り込まれている。上縁の径  $4 \times 3$  m、深さ約 1 m で、南北の長辺は 2 段に掘られているが、東西辺は 1 段である。壙内における埋葬の手順は、まず壙底に川砂を敷いて木棺を安置し、これを粘土で被覆するとともに木棺の側面を土で固定しその上に再び



第IV号墳  
主体部(1)



第IV号墳  
主体部(2)



30cm前後の厚さで砂、つづいて山土を入れて埋めている。木棺は長さ3m、幅1~0.7mの組み合せ式のもので、墳底には側板をはめこむための溝が設けてある。棺内には大刀1口が埋葬されていたほか多量の赤色顔料が認められた。

墳頂部ではこのほか西南寄りの平坦部で箱形の土壙1個がみつかっている。これは長さ2.2m、幅55~60cm、深さ30cmほどのもので、さきの大形土壙を一部切り込んで設けられていた。墳丘の西側裾に堆積していた黒色土中から須恵器とともに鉄製鋤先、鎌が発見された点を併せ考えれば、この土壙は四隅突出型方墳とは直接関係のない後出のものといえる。なお、これら墳頂部埋葬施設のほかに、この古墳では北側の墳裾に近い周溝内から1.3×1m、深さ30cmあまりの土壙1個が発見されている。副葬品は認められなかったが、これも一種の埋葬施設とみてよかろう。

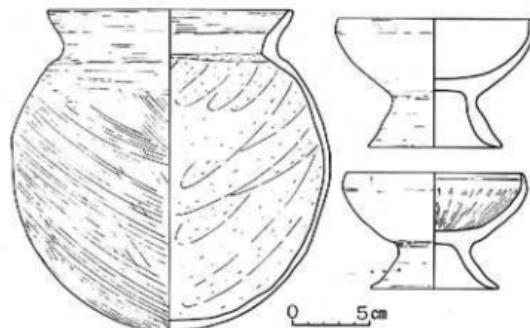
遺物は棺内に副葬されていた大刀1口のほか、外部から発見されたものとし

て土師器の壺、器台、高環形土器などがある。大刀は全長約68cm、幅2.6cm、重ね0.5cmの比較的細身の刀身をもち、木製の柄、木鞘を着装するものである。土器類は主に墳丘の斜面および列石付近から発見されたもので、量的にはそう多くないが、東南隅や西辺中央ではかなりまとまりのある出方を示していた。すなわち、その出土状態は仲仙寺古墳群などのように主体部上面に一括して供献するという形跡はあまり顕著にみられなかった。土器形式については器種が少く、的確に把握できないが、口縁部の形態や高環脚部の形式などから鍵尾Ⅱ式のなかでもやや新しい要素を備えたものとみることができる。

**第V号墳** 丘頂部の北端に営まれた円墳である。既に盛り土の大半が失われ、全体の約1/3ほどが残っ



第V号墳 周溝内の埴輪円筒



ているのみで、主体部も不明であった。南側の調査区で幅1.6~2.5m、深さ約30cmの弧状にのびる周溝が認められ、その溝底には埴輪円筒が立て並べられていた。遺物はきわめて少く埴輪のほかに若干の須恵器片が出土したにすぎない。

**第VI号墳** 第Ⅲ号墳の後方部東側に4mほどへだてて営まれた方墳で、第Ⅶ号墳と同様墳丘の大半が失われ、東側は崖によって消滅していた。周溝は幅1.5m、深さ35cmあまりで方形にめぐり、長さは完存していた西辺部で約8mを測る。遺物としては周溝内の堆積土中に埴輪円筒片が散見されたほか、西側周溝のほぼ中央部より土師器の高环6、菱形土器1個が一括まとまって検出された。恐らく埋葬儀礼の一貫として周溝内に土器を供える風習があったのであろう。なお、墳丘の中心からはずれた北西部で土壌1個を発見したが、本墳に伴うものかどうかは不明であった。時期は埴輪円筒の形質が第Ⅲ号墳のものと類似していることなどから、第Ⅲ号墳とはほぼ同時とみられる。

**住居跡** 第Ⅳ号墳の西南突出部に隣接した第Ⅲ号墳の前方部西側で検出されたもの



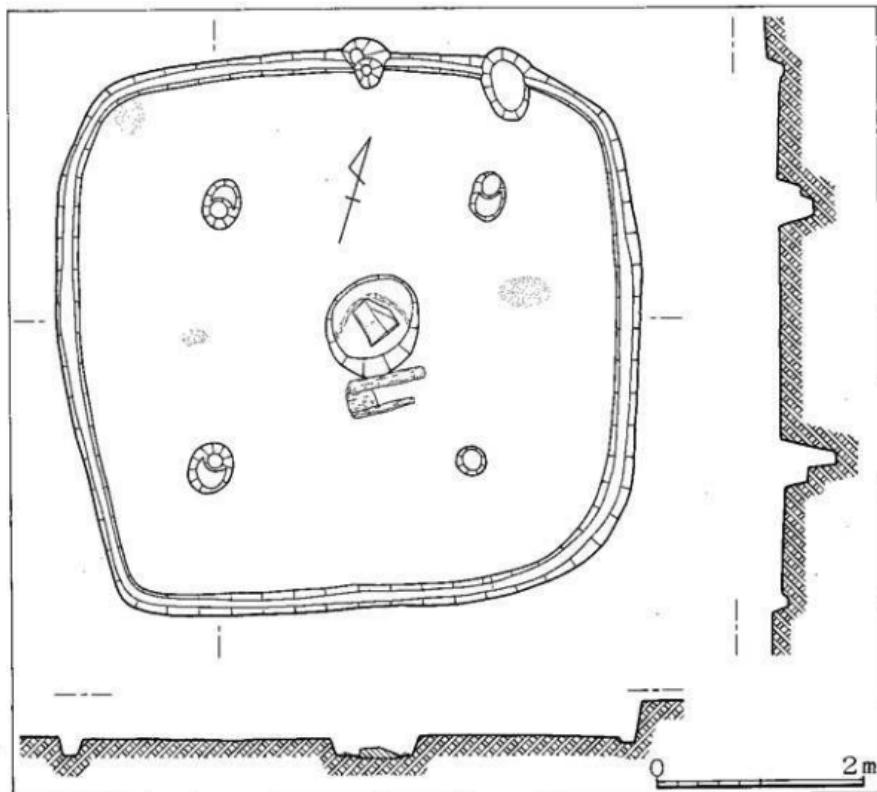
である。この住居跡は第Ⅱ号墳の築造以前に営まれており、西半部は前方部の盛り上の下に埋存していた。

東西辺がわずかに長い隅丸方形プランを呈し、規模は南北径5.4m、東西径5.6mを測る。壁面はほぼ垂直に掘り込まれており、高さは東壁がもっとも高く約40cmある。なお床面の周囲には幅約20cm、深さ3~10cmあまりの周溝があげらされている。

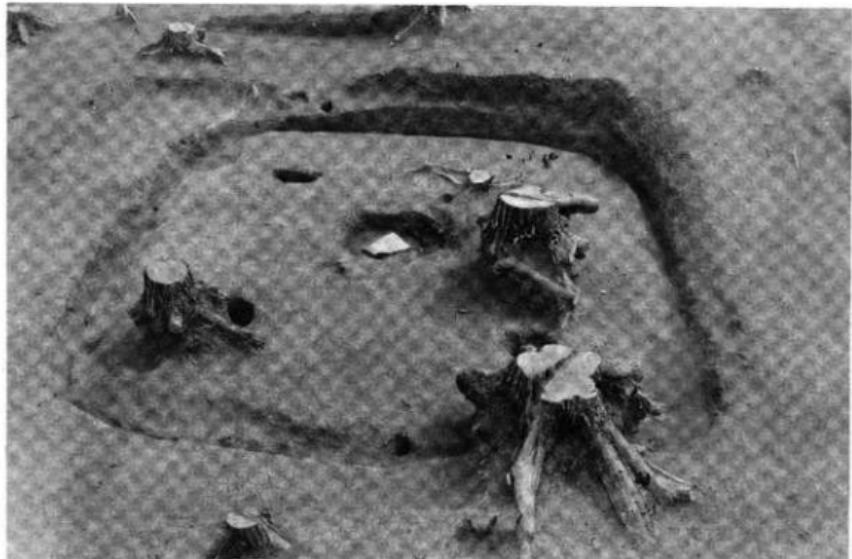
床面の状態は全般的によく踏み固められ、ほぼ平坦になっていた。柱穴はそれぞれ対称的な位置に4個掘られている。これらはいずれも主柱穴と考えられるもので、内側に若干傾斜して掘り込まれていることが注意された。柱間は2.5mほどである。

床面の中央に板石を入れた1×0.9m、深さ約20cmの軒跡とみられるピットがあり、周囲には木炭が相当量遺存していた。また、北辺にも浅いくぼみが2ヶ所あり、うち北東隅に近いものには土師器の器台1個が含まれていた。

器台はいわゆる鼓形のもので、受台と脚台との間隔が狭く、鍵尾式ないし小谷式併行期の特徴をもつものである。



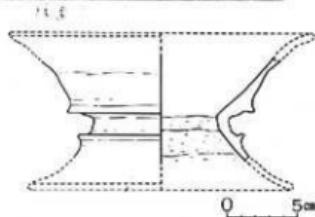
住居跡実測図



### まとめ

既に消滅した第Ⅰ号墳を加えると、宮山丘陵には以上のように古墳6基、住居跡1棟が存在し、古墳は四隅突出型方墳1基、前方後方墳2基、方墳2基、円墳1基に区別された。

これらのうち最も特徴的なものは、四隅突出型の第Ⅳ号墳である。従来、この種の古墳は出雲で4ヶ所8例、石見で1ヶ所1例が確認されているが、仲仙寺の1群を除くと、他はそれほど顯著なものとはいえない。宮山丘陵に隣接する仲仙寺古墳群の場合、石材の質・使用法等に特殊な点が認められ、かつ墓壙は第9号墳で11個、第10号墳で3個といずれも複数であった。それに対して宮山第Ⅳ号墳は、墳央部に単独の墓壙をもち、しかもその規模が大きく、副葬品も従来のものには認められなかった大刀を含むなど、仲仙寺古墳群より一段発展した姿がみられ、同時に竪穴式石室を内部構造とする畿内の古墳ともかなり接近した要素がうかがえた。墳丘の規模が仲仙寺古墳群より大形であることもその証左となろう。また、墳丘の裾をめぐる列石および斜面の貼石も仲仙寺とはやや趣きを異にするものとして注目される。すなわち、仲仙寺9・10号墳は主に板石を使用しているのに対して、宮山第Ⅳ号墳は転石と山石を利用し、しかも列石の一部をあたかも基壙状に配置するというかなり入念な仕事をみせていた。





調査後の宮山古墳群（北から）

他の古墳については、第Ⅱ・第Ⅴ号墳などで出雲地方には発見例の少ない埴輪円筒列がわずかながら確認されたことが注目される。ことに第Ⅴ号墳の場合、周溝の溝底に埴輪円筒を立て並べる風習があつたことを示すものとして初見に属するであろう。さらに、全面埴墓として利用されている丘陵上に堅穴住居跡1棟が営まれていたことも興味あることである。この住居跡は時期的に四隅突出型の第Ⅳ号墳といちらしく抵触し、かつ墳丘の南西突出部に接して建られている。宮山の丘陵は平野に突き出した狭隘な独立丘陵で、特に冬場は北からの強い季節風をまともに受け、日常生活を営むには決して最適の地とはいがたい。とすれば、これは一般の生活跡というよりもしろ埋葬遺跡という特殊な場に伴う建物として第Ⅳ号墳との一体性において理解すべきものであろうか。

ともあれ、この宮山古墳群は多くの新知見とともに古墳の発生をめぐる問題など、山積する重要な課題に多くの示唆を与えたというべきであろう。

**あとがき** この概報は発掘担当者の近藤正先生が残された記録をもとに、調査に参加した松本岩雄（国学院大学生）、千家和比古（国学院大学大学院生）、前島己基（島根県教育委員会文化課主事）の3名が協議し、前島がまとめたものである。遺跡の重要性を考えた場合、内容的にはお検討すべき点も多々あるが、私どもとしては一日も早くこの概報を作成し、調査半ばにして急逝された近藤先生の靈前に捧げたかった。そして、調査のかたわら遺跡の現状保存について東奔西走された先方に一刻も早くその願いがかなったことを報告したかった。いまはた

だ故先生の冥福を祈るのみである。

宮山古墳群は調査終了後、隣接する史跡仲仙寺古墳群ときわめて深い関連性をもつものとして仲仙寺古墳群の追加指定という形で国の史跡に指定される方向に向いつつあり、現在関係者との間で土地買収その他について最終的な交渉が行われているところである。

なお、表紙の題字は近藤先生の調査日誌のなかからとった。また、第Ⅰ号墳の図面および写真については山本清先生のご厚意により報告書から転載させていただいたことを付記しておく。

（前島己基）

1127

昭和49年6月30日発行

宮山古墳群

発行 島根県文化財愛護協会  
松江市嚴町1番地

印刷 株式会社報光社  
平田市平田町993番地